

読本における書簡文の役割 —元元堂編集実科高等女学校読本を中心に—

Roles of Letters in Tokuhon Readers :
A Case Study of Practical Course (Jikka) Girl's High Schools Textbook
published by Gengendou

中 嶋 真 弓

Mayumi NAKASHIMA

1、問題の所在

滑川道夫（1977）は、書簡文について「書簡文のかきかたが、ながく作文の中心に位置をしめていくのは、明治期作文の大きな特色である。明治期のみならず大正期・昭和期を通じて主要な指導項目となっていく」（pp.39-40）と述べている。明治期から昭和期にかけて書簡文が作文の中心にあったというのである。では、作文の中心にあった書簡文は、講読においてどのような位置づけにあったのであろうか。作文と講読との連絡の在り方、書簡文を通して作文がどのようになされていたかを明らかにすることは、作文教育を通史的に捉える上で意義のあることだと考える。

そこで、本稿では、元元堂編集実科高等女学校読本に採録された書簡文を史料として、実科高等女学校読本における書簡文の役割を明らかにすることを目的とする。実科高等女学校に着目するのは、作文教育を史的に捉える場合、小学校、高等小学校、中学校、高等女学校、そして、実科高等女学校といった各校種における書簡文の位置づけを総括していくことが大切だと考えるからである。しかし、先行研究の多くが小学校、中学校、高等女学校が中心で、実科高等女学校についての究明があまりなされていないのが現状である。本稿では、実科高等女学校の書簡文の役割を明らかにすることによって、作文教育を通史的に捉えることにつながると考えている。

本稿で対象とする実科高等女学校読本は、元元堂編『実科高等女学校用国語読本全8冊』（1911.11.13発行）（以後、元元堂実科読本とする）である。元元堂実科読本を対象としたのは、元元堂編集の高等女学校読本『高等女学校用国語読本全10冊』（以後、元元堂高女読本とする。本稿では1912.10.7発行訂正5版を対象とする）が、吉田彌平・小島政吉・篠田利英・岡田正美編『女子国語読本全10冊』（以後、吉田高女読本とする。本稿では1912.10.31発行訂正9版を対象とする）とともに多くの高等女学校で使用されていたことから、実科高等女学校においても使用されたと考えられるからである。文部省（1910）『明治四十三年度現在師範学校中学校高等女学校使用教科図書表』によれば、高等女学校の読本で最も多く使用されているものが吉田高女読本で192校

中66校(34.4%)、そして、元元堂高女読本は、192校中31校(16.1%)で使用されている。これら2つの読本は長きにわたり発行されている点からも史料として活用できると考える。

研究方法として、元元堂実科読本に採録された書簡文を、内容、文体及び頭語・結語の2観点から検討し、読本における書簡文の役割について明らかにする。その際、元元堂高女読本、吉田高女読本、吉田実科読本(本稿では、『女子国語読本実科用』1912.1.17再版を対象とし、以後吉田実科読本とする)と比較し、女子の読本における書簡文について議論する。また、中学校の読本との比較も試みる。対象とする中学読本は、多くの中学校で使用されていた吉田彌平編『中学国文教科書全10冊』(以後、吉田中学読本とする。本稿では1911.1.28発行修正4版を対象とする)とする。

2、元元堂実科読本の概要

元元堂実科読本の緒言は、6項目からなっているが、その中の1から4の項目には次のようにある。下記に引用する。

- 一、本書は、実科高等女学校及びこれと同一程度の女学校の国語科に於ける講読用教科書に充てんがために、明治四十四年文部省所定の教授要目に準據して編纂したるものなり。
- 一、本書は、昨明治四十三年改定せられたる国定小学読本と相連絡せしめ、その内容の重複を避くるは勿論、送り仮名竝に句読の施し方等に至るまで、専ら範をこれに取り取り。
- 一、本書に採録せる文章の形式は、普通散文・韻文・書牘文・口語文等あらゆる種類に涉り、正格にして典雅、実用に適し、且、作文の模範となり、併せて諷誦に適するものよりこれを精選せり。
- 一、本書に採録せる文章の内容は、極めて多方面に涉れり。就中、女徳の修養、堅実なる思想の養成、高尚なる趣味の涵養、実用的知識の供給、及び家政の整理等に関する材料の選択には、三たびその意を致し、以て賢母良妻の育成を以て唯一の標的とせる実科高等女学校教育の要旨に適合せしめんことを期せり。(5、6は省略)

採録した文章は作文の模範となるもので、その内容は女徳の修養、実用的知識の供給となるものだとしている。採録書簡文もこの役割を担っているということである。

元元堂実科読本に採録されている書簡文は、〈表1〉に示したように全52通で全体の21.3%(52/244)を占めている。吉田実科読本の採録割合が15.9%(39/245)であるのと比べても多いことが分かる。また、高女読本と比較しても元元堂高女読本が7.8%(23/293)、吉田高女読本が9.1%(27/297)であり、元元堂実科読本は書簡が多くとられ、重視しているといえる。吉田中学読本の書簡文の採録をみると6.9%(18/260)である。書簡文の採録状況をみても、実科高等女学校が実用を重視していることが分かる。

読本の課の構成、配列は、巻1から巻6までは課名が内容の観点から整理(本稿では、これを内容項目とする)されており、その中に、名家の書簡がいくつか挿入されている。巻7、巻8は、

〈表1〉採録書簡文

巻	採録書簡文	巻	採録書簡文	
巻1	1-3 誘引	巻4	4-5 催促・請求	
	花見に誘ふ文		仕立物を催促する文	
	同返事その一		写真を乞ふ文	
	同返事その二		同返事	
	展覧会見物に誘ふ文		4-15 田舎の祖母に	
	1-7 旧師のもとに(樋口一葉)		祖母に代りて従妹より	
	1-21 帰宅の知らせ		3-23 公子の躰方を申し遣す文	
	同返事		3-29 問合	
	1-28 貸借		居所を問合する文	
	書物を借る文		温泉宿を問合する文	
	同返事		5-8 請託	
	器物を借る文		物品の送届を頼む文	
同返事	買物を頼む文			
巻2	2-11 報知	巻5	来診を乞ふ文	
	安着を報ずる文		5-14 人の新盆に	
	転居を報ずる文		同返事	
	死去を報ずる文		5-19 謝礼	
	2-21 しみぬき方を問はれしに答ふ		餐応になりしを謝する文	
	2-27 贈答		出立の見送を謝する文	
	梅香を贈る文		6-6 招待	
	同返事		鎮守祭に招く文	
	雑を贈る文		同返事	
	贈を贈る文		賀の祝に招く文	
巻3	3-9 註文	巻6	5-16 年始の贈答(下田歌子)	
	置卵紙を註文する文		同返事	
	染物を註文する文		5-19 慶弔	
	反物を註文する文		卒業を祝ふ文	
	3-18 見舞い		友の死せし後遺族に送る文	
	病氣見舞の文		巻7	7-3 花の頃都にある娘に(樋口一葉)
	同返事			7-13 おさめどのへ(細井平洲)
	暑中見舞の文		巻8	8-10 息女に教訓せし文(扇丸光廣)
	3-30 郷里の弟に(高山樗牛)			8-24 新婚に与ふる書(江戸坦庵)

名家の書簡のみの採録である。巻6までは、往復書簡での採録が多く、往信が75.0% (39/52)、返信が25.0% (13/52) で往復書簡での採録の課数をみると27.5% (11/40) である。往復書簡で一对の学習として設定されていることは、書簡が往来物として実用的に機能するための設定といえる。〈表1〉にある、1-3等は、巻1の3課の意味で、その課の中に、「花見に誘ふ文」「同返事その一」等が採られている。この構成や往復書簡での提示は、吉田実科読本も同様の傾向にあり、吉田実科読本においても、巻1から巻6の途中までは課名が内容項目で分類されている。そして、巻6の途中から巻8にかけて名家の書簡が採録され、巻7、巻8は名家の書簡文のみの採録となっている。さらに、吉田実科読本では、書簡文の前に、その内容項目の説明がなされており、例えば、巻1の9課に「慶賀」の書簡文として(一)入学を賀す、(二)新居を賀す、(三)出産祝の返事の3通が採録されているが、書簡文の前に慶賀文の説明が付されている。慶賀文の説明としては「慶賀の状は心をこめて、先方の慶事をいはふべし。おくれて時を失ふべからず、ことに旅立の祖道などは其の出発の間に合ふを要す。事柄によりまた、先の人によりては、『返す』『去る』『別る』などの語を避くるなどの注意もあるべし。場合によりて、品物を添ふることあり。」(巻1 pp.46-47)とあり、慶賀の意味や気を付けるべき事柄が記されている。そして、この構成は元元堂高女読本や吉田高女読本、及び吉田中学読本にはみられない。往復書簡での学習については、吉田実科読本が5.6% (1/18)、元元堂高女読本が35.3% (6/17)、吉田高女読本が22.7% (5/22) で、吉田中学読本は0.0% (0/18)

である。吉田実科読本も元元堂実科読本と比較し、数値的には低い、同じ内容項目の中に往信と返信が組み込まれていることから往信、返信の学習が充実しているといえる。吉田中学読本には往復書簡の設定がないことを勘案すると、往復書簡での一对の学習をすることが女子書簡文においては多くなされ、これは実生活での往来物としての役割や効果を理解させ、円滑な交際を行

うことを書簡文で目指していたことを意味しているといえる。

男女の作者をみると、元元堂実科読本の52通中、男性作者は5.8% (3/52)、女性作者は94.2% (49/52) で女性作者中心である。吉田実科読本が男性作者30.8%、女性作者69.2%、元元堂高女読本は男性作者39.1%、女性作者60.9%、吉田高女読本では男性作者44.4%、女性作者55.6%と比較すると、女性作者に偏っていることが分かる。吉田中学読本をみると、男性作者100.0%、女性作者0.0%である。元元堂実科読本においては、より女性を意識した採録がなされているといえ、実科高女生が実生活で活用できることを強く打ち出しているといえる。

毛筆体での提示が98.1% (51/52) で、楷書は3-23「公子の躰方を申し遣はす文」1通 (1.9% 1/52) のみである。これは、吉田実科読本に毛筆体での採録がないことを考えると、元元堂実科読本が書簡文を毛筆で書くことを推奨していたといえる。元元堂高女読本の毛筆体採録割合は73.9% (17/23) であるが、吉田高女読本は25.9% (7/27)、吉田中学読本が55.6% (10/18) であることと比較しても多いといえる。書簡文は毛筆で書くという古くからの慣習が、元元堂実科読本から看取できる。

元元堂実科読本において、採録書簡文の課名が内容項目で整理されていること、女性作者が中心であること、毛筆体での提示が大部分を占めていることから、実科高女生が実生活の中でも活用できるような参考書的な役割を有しているといえる。

では、どのような書簡文が採録されているのであろうか。

3、元元堂実科読本の内容的特徴

〈表2〉に、採録書簡文の内容から内容項目を設定し整理した。〈表2〉は、〈表1〉の1-3 誘引、1-28 貸借、2-11 報知、2-27 贈答、3-9 註文、3-18 見舞い、4-5 催促・請求、3-29 問合、5-8 請託、5-19 謝礼、6-6 招待、5-19 慶弔の課に採録されている書簡を②「課名が内容項目の書簡」とし、1-7 旧師のもとに、1-21 帰宅の知らせ等課名が内容項目でない書簡を③「課名が内容項目ではない書簡」として整理し数値化した。なお、内容項目は、課名に依った。また、表中に、例えば返信：報知とあるものは、返信で、内容的に報知であることを指す。なお、課名が内容項目になっている課においては、返信が多く含まれているが、その課名の中に位置づけてあることを優先し、返信：○○とはせず数値化した。

〈表2〉から、多くの内容項目から採録されていることが分かる。往信のみの吉田実科読本の内容項目をみると、「報知、報知(旅信)、忠告、見舞、慶賀、候問、誘引、招待、贈答、依頼、貸借、慰問、紹介、註文、請求・催促、短箋」、元元堂高女読本では「忠告、報知、誘引、見舞、謝礼、慶賀、弔慰、謝絶」、吉田高女読本では「報知、報知(旅信)、誘引、見舞、照会、問合、依頼、弔慰、贈呈、忠告」等の内容項目がみられる。しかし、吉田中学読本では、「報知、報知(旅信)、依頼、招待、忠告、公開状」と高女や実科高女に比べると少ない。つまり、多くの内容項目が採られている傾向は女子書簡文の特徴といえる。実生活の中でどのような状況下においても活用できる、実用的に必要な書簡の参考書としての役割がこのような内容項目からも看取できる。元元堂実科読本に採録された52通の書簡文には、戦争に関するもの、外国からのものは

(表2) 内容項目

分類	①すべての書簡		②課名が内容項目の書簡		③課名が内容項目ではない書簡	
	書簡数	割合	書簡数	割合	書簡数	割合
誘引	4	7.7%	4	11.1%		
贈答	6	11.5%	4	11.1%	2	12.5%
報知	5	9.6%	3	8.3%	2	12.5%
貸借	4	7.7%	4	11.1%		
注文	3	5.8%	3	8.3%		
見舞	4	7.7%	3	8.3%	1	6.3%
催促	1	1.9%	1	2.8%		
請求	2	3.8%	2	5.6%		
忠告	4	7.7%			4	25.0%
問合	2	3.8%	2	5.6%		
請託	3	5.8%	3	8.3%		
弔慰	2	3.8%	1	2.8%	1	6.3%
謝礼	2	3.8%	2	5.6%		
招待	3	5.8%	3	8.3%		
慶賀	1	1.9%	1	2.8%		
安否	1	1.9%			1	6.3%
返信：報知	1	1.9%			1	6.3%
返信：回答	1	1.9%			1	6.3%
返信：安否	1	1.9%			1	6.3%
返信：謝礼	2	3.8%			2	12.5%
合計	52	100%	36	100%	16	100%
【備考】						
・小数第2位を四捨五入しているために、100%にならない場合がある。						

が宜しく候。文武を励ませ、それにて死に候ほどの子は惜しからず候へば、死に候うても苦しからず候。他へ養子に遣はし候うても、柔弱にて、文武これなき者にては、水戸家の外聞宜しからず」ともある。「おさめどのへ」は、細井平洲が妻のおさめに出した書簡である。冒頭に「刈安賀村に三輪と申し候百姓の妻五十七歳になり申し候」とあり、その妻の貞淑なことをおさめに伝えている。

「息女に教訓せし文」は、烏丸光廣が息女の結婚に際し、女性として、妻としてどうあるべきかを説いた書簡である。東京開成館編輯所（1924）には、この教材の要旨として「かやうに周到的な注意を垂れてくれる親の恩愛に感じさせて、一面にはその恩愛深い親の真心から送り出た婦人として、心得てをらなくてはならない節々を知らせる」（p.31）とある。「新婦に与ふる書」は、江戸担庵が新婦に宛てた教訓消息である。書簡は「一、夫を、天と致し候ふことは、だれも辨へ居り候へば」から始まり、5つの内容が書かれている。文中には、「柔順婉曲にして、夫に従ふは、女の道と申すことを心得申すべき事に候ふ」ともある。元元堂実科読本では、7-13「おさめどのへ」で貞淑な女性について触れ、8-10「息女に教訓せし文」、8-24「新婦に与ふる書」で結婚する女性、

採録されていない。

内容項目の忠告4通は、内容項目が課名でない書簡文として採録されている。4通の内訳は3-23「公子の躰方を申し遣わす文」（徳川斉昭）、7-13「おさめどのへ」（細井平洲）、8-10「息女に教訓せし文」（烏丸光廣）、8-24「新婦に与ふる書」（江戸担庵）である。「公子の躰方を申し遣はす」は、徳川斉昭が子どもたちの躰について女中頭の吉田に事細かに指示した書簡であり、その内容は厳しいものである。本文中には、「風を引き申すべしなどとして、用心致させ候は以ての外に候。とかく武士の子は手づよく、手あらに成長致し申さず候うては、追ひ追ひ成長の上、公家や町人出家の様に成り行き、天下の御為を致し候様に相成らざるゆゑ、何分にも手強くからだを幼年より鍛へて育て候様に致したく候。さて、文武共に精致させ候

結婚後の在り方を畳みかけるように書簡文を配列することによって理解させ、女性としての生き方を方向づけているといえる。このような傾向は女子の読本にみられ、吉田実科読本では「獄中より妹へ」（吉田松陰）、「息女教訓の文」（烏丸光廣）、「妹にさとす」（吉田松陰）を巻7、巻8に採録している。吉田実科読本には、吉田松陰の書簡文が2通採録されているが、両書簡とも妹千代に宛てた女訓として知られている書簡である（広瀬豊（1937:p.111,p.210）。また、元元堂高女読本には「おさめどのへ」、「息女に教訓せし文」、「妹にさとす」、「新婦に与ふる書」、吉田高女読本には「妹にさとす」、「息女に教訓す」、「庭の訓」（阿仏尼）が採録されている。これらはすべて巻の後半に採録されていることから、名家の書簡として読んで理解するものとして位置づけられているといえる。そして、これらの教材は女訓の書簡文として女子書簡文の定番といえる。これらの作者はすべて男性である。前述したように全体的に女性作者が多かったが、内容項目が課名でない書簡文のみを対象にした場合の作者をみると、男性作者5名（31.3% 5/16）と女性作者11名（68.8% 11/16）のように、男性作者も31.3%採録されているのである。読本の中に、実用的な書簡文とともに、女性の生き方、女性としての有様を読んで理解させる書簡の二つの役割を書簡文は担っているのである。読本において女訓的な内容を伝えるのであれば、説明的な文章でもよいのであるが、書簡文の形式を借りてそれを注入する意味がそこにあると考えられる。書簡文の特徴として相手が決まっている、伝えたい内容が明確である、説明文より平易な表現で語るように叙述されている等の効果を生かし、実科高女生が自分自身に向けて語り掛けられているといった自分のこととして受け取ることができるようにしているといえる。つまり、書簡文には、書簡文の形式、よさを生かして内容理解を深めることができる効果があり、それがこのような採録に結びついているといえる。これは、書簡文本来の通信的役割以外の役割、「書簡文の役割の拡大」と捉えることができる。そして、読本ではその役割を書簡の内容項目忠告が担っているといえる。吉田中学読本での忠告をみると、「公子の躰方を申し遣はす」、「血氣に戒む」（吉田松陰）、「妹にさとす」、「寺門政次郎に答ふ」（藤田東湖）の4通である。高女読本や実科高女読本と同様の書簡も採録されているが、これも男性としての生き方、人としてどうあるべきかを書簡文の形

〈表3〉吉田実科読本の課名が内容項目の書簡

内容項目	書簡数	割合
報知	3	10.0%
慶賀	3	10.0%
候問	2	6.7%
誘引・招待	3	10.0%
贈答	2	6.7%
依頼・貸借	4	13.3%
慰問	4	13.3%
紹介註文	3	10.0%
請求催促	3	10.0%
短箋	3	10.0%
合計	30	100%

〈表4〉吉田実科読本の課名が内容項目ではない書簡

内容項目	書簡数	割合
忠告	1	11.1%
報知(旅信)	3	33.3%
見舞	1	11.1%
返信：忠告	2	22.2%
返信：安否	1	11.1%
返信：礼状	1	11.1%
合計	9	100%

式を借りて理解させるための採録である。

〈表3〉と〈表4〉に吉田実科読本の内容項目を整理した。〈表3〉は「課名が内容項目の書簡」で〈表4〉が「課名が内容項目でない書簡」である。吉田実科読本においても忠告と返信：忠告を合わせると33.3%となり、報知（旅信）とともに多く採録されていることが分かる。しかし、元元堂実科読本と吉田実科読本との相違として、報知（旅信）に着目したい。報知（旅信）は、「～

ると33.3%となり、報知（旅信）とともに多く採録されていることが分かる。しかし、元元堂実科読本と吉田実科読本との相違として、報知（旅信）に着目したい。報知（旅信）は、「～

だより]、「～通信」として、書簡の中では紀行文的なもので、書き手が見たこと、感じたことを自由に豊かに書くことができる、自由作文に近いものである。形式的な書簡文の中でも、より強く書き手の意思が介在する文章であり、作文の書き方としての範文になるものといえる。

しかし、これが元元堂実科読本にはみられないのである。編者の考え方の違いであるが、女性作者が多いこと、忠告の書簡文が多く採録されていること、毛筆体、候文体が多くみられることから、元元堂実科読本は自由作文としての個性の発揮というより実生活に生きた書簡を重視し、交際としての通信本来の書簡文を書く力を重んじていたといえる。

4、文体及び頭語・結語の特徴

〈表5〉に文体を整理した。文体については、文末文体に着目して数値化した。なお、数値化するにあたっては、北澤尚(1999)の分類に依拠した。北澤尚(1999)は、「近代の書簡文は、その文末形式に着目すると、候文・文語文・口語文の三種に分けることができる。・候文：文末が「候」で終わる文。・文語文：文末が、上記の「候」を除いた、活用語の文語形

で終わる文。・口語文：文末が活用語の口語形で終わる文。ある一通の書簡が、この三種の文のうち、いずれか一種だけを専用するとき、それはまさしく「候文体」「文語文体」「口語文体」の書簡とよぶにふさわしい。」とした上で100%ではなく、例えば候文体が80%（少数第一位を四捨五入）以上を占めるものを「候文体」とするとしている。そこで、本稿では、次のように規定した。

- ・候文体は、総文数80%（少数第2位を四捨五入）以上文末が「候」で終わるもの。
- ・文語文体は、総文数80%（少数第2位を四捨五入）以上文末が文語形で終わるもの。
- ・口語文体は、総文数80%（少数第2位を四捨五入）以上文末が活用語の口語形で終わるもの。
- ・上記以外は、混合文体とする。

文体では、候文体が中心で75.0%を占め、候文体と文語文体が混在して混合文体も23.1%ある。採録書簡文52通332文の文末文体の内2回以上使われているものを〈表6〉に整理した。また、〈表7〉には、吉田実科高女、〈表8〉には、吉田中学読本の文末文体を載せた。吉田実科高女は346文あり、その中の2回以上使われているもので、吉田中学読本は、340文中1.0%以上のものを載せた。吉田実科読本の文体は、候文体64.1%、混合文体35.9%で、候文体が多く採録されている。元元堂実科読本、吉田実科読本の両読本とも候文体の採録が多いといえる。候文体の割合について各校種の発行年ごとの変遷をみると、吉田実科では、1910-1912年64.1%、1914-1915年64.9%、1919-1920年68.6%である。また、吉田高女読本では、1903年78.6%、1907年64.7%、1912年85.2%、1918年76.2%、1921年86.7%、1924年84.6%と増減はあるが高い値で推移している。これは、吉田中学読本でも共通で、1907年73.3%、1911年61.1%、1912年60.0%、1918年65.2%、1923年53.8%、1925年33.3%、1934年57.1%と高女読本や実科読本より低い値ではあるが、1934年という昭和初期にあっても57.1%の候文体の書簡文が採録されているのである。このように、

〈表5〉 文体

文体の種類	書簡数	割合
口語文体	1	1.9%
候文体	39	75.0%
混合文体	12	23.1%
合計	52	100%

〈表6〉文末文体

文末文体	合計	割合(%)
候	84	25.3
申し候	34	10.2
べく候	32	9.6
申し上げ候	18	5.4
たく候	18	5.4
御座候	11	3.3
存じ候	10	3.0
まゐらせ候	8	2.4
まで	7	2.1
いたし候	6	1.8
存じ奉り候	6	1.8
度候	6	1.8
候か	5	1.5
のみ	4	1.2
願い上げ候	3	0.9
～事	3	0.9
～こと	3	0.9
～ず	3	0.9
～なり	3	0.9
申し居り候	2	0.6
さし上げ候	2	0.6
候へ	2	0.6
候ひき	2	0.6
給ふな	2	0.6
候はず	2	0.6
候よし	2	0.6
参らせ候	2	0.6
宜し	2	0.6

〈表7〉吉田実科読本の文末文体

文末文体	合計	割合(%)
候	79	22.8
たく候	24	6.9
べく候	23	6.6
御座候	19	5.5
存候	13	3.8
～なり	11	3.2
申上候	9	2.6
まで	8	2.3
まゐらせ候	8	2.3
致し候	7	2.0
候へ	7	2.0
候ひき	7	2.0
申候	6	1.7
候はずや	5	1.4
仕候	5	1.4
たく	5	1.4
存上候	4	1.2
申し候	4	1.2
居り候	4	1.2
～あり	4	1.2
べし	4	1.2
候由	3	0.9
奉り候	3	0.9
候はん	3	0.9
致候	3	0.9
奉賀候	3	0.9
申すべきか	3	0.9
賀し奉り候	2	0.6
致し居り候	2	0.6
迄	2	0.6
居候	2	0.6
いたし候	2	0.6
候か	2	0.6
候や	2	0.6
のみ	2	0.6
奉存候	2	0.6
被下度候	2	0.6
べし	2	0.6
如し	2	0.6

〈表8〉吉田中学読本の文末文体

文末文体	割合(%)
候	26.6
御座候	7.5
申候	6.6
べく候	6.3
なり	6.3
存じ候	2.8
申し候	2.2
存候	1.9
ず	1.9
たく候	1.6
だ	1.6
候はずや	1.3
候ひき	1.3
居候	1.3
致候	1.3

書簡文においては候文体の採録が多いことは各校種共通のことで、それが、昭和初期まで続いているのである。

文部省は1910年各師範学校に口語体書簡文調査を依頼し、それを1911年に『口語体書簡文に関する調査報告』（以後、『報告』とする）として刊行している。この中に愛知県第二師範学校が提出した文書があるが、その中に次のような文言がみられる。

児童に家庭にある書簡を持参させた。但し年賀状は省く。学校独自でアンケートをした結果を記している（引用者補）其結果約三千通の中にて、口語体は僅々四通に過ぎざりき。就中三通は女子の手になりしものなりき。（p.41）

3000通集まった書簡の中に口語文体のものが4通だけみられたというのである。この調査の目的として文部省は『報告』の例言に次のように述べている。

『報告』の例言は、11項目からなっているが、(二)を下記に引用する。

(二) (前略) 報告書ハ之ヲ六種ニ分チテ整理シ、口語体書簡文ノ教授ニ関スル研究資料トナサンコトヲカメタリ。若シ之ニヨリテ其ノ研究ヲ進メンニハ、広ク綴リ方教授ノ改善ニ資スルトコロ少カラザルベシ。

この調査は、「広ク綴リ方教授ノ改善ニ資スル」としているのである。口語文体が世に認められる中で、実科高女、高女、中学校の書簡文においては逆行する傾向がみられるのである。各校種の口語文体の採録割合をみると、元元堂実科読本では〈表5〉にあるように1.9%、吉田実科高女読本0.0%、元元堂高女読本4.3%、吉田高女読本7.4%、吉田中学読本5.6%と各校種とも低い数値である。この数値からも、書簡文にはほとんど口語文体はみられないことが分かる。

〈表9〉 頭語 (往信)

頭語	種類	書簡数	頭語別割合
一筆申しまゐらせ候	筆系	1	2.6%
前略	漢語系	1	2.6%
頭語なし		37	94.9%
合 計		39	100%

次に、頭語・結語に着目する。頭語、結語の種類の種類は、茗荷円(2017)に依拠した。〈表9〉に往信の頭語を整理した。往信の頭語では、「頭語なし」が中心である。「頭語なし」は、時候の挨拶や冒頭部分から本題に入るものである。吉田実科読本では「頭語なし」70.0%、「筆系」16.7%、「漢語系」13.3%、元元堂高女読本は「頭語なし」92.9%、「筆系」7.1%、吉田高女読本は「頭語なし」90.5%、「筆系」と「漢語系」が4.8%、吉田中学読本は「頭語なし」62.5%、「漢語系」35.7%である。女子の読本は「頭語なし」と「筆系」が多くみられ、吉田中学読本では、「頭語

〈表10〉 頭語 (返信)

頭語	種類	書簡数	頭語別割合
御文拝見いたし候	拝見系	1	7.7%
御文今日の午後つき申し候	その他	1	7.7%
頭語なし		11	84.6%
合 計		13	100%

なし」の他に「漢語系」もみられる。

〈表10〉の返信の頭語においても、「頭語なし」が大部分を占めている。

吉田実科読本では「その他」44.4%、「有難系」22.2%、「拝見系」、「漢語系」、「頭語なし」が11.1%、元元堂高女読本は「頭語なし」66.7%、「その他」22.2%、「拝見系」11.1%、吉田高女読本は「頭語なし」と「その他」が33.3%、「拝見系」と「有難系」が16.7%、吉田中学読本は「頭語なし」と「その他」が50.0%である。返信の頭語は、書簡を貰ったお礼から始まるなど、ある程度定型の文を添えるために、往信に比べて「頭語なし」が少ないといえる。この傾向は、校種関係なく同様といえる。

「頭語なし」が全体的に多くみられることから、頭語においては、書くことが必須ではないといえる。

〈表11〉結語では、女性が使う結語の定番「かしこ系」が中心である。頭語と違い、結語では「結語なし」は少なく、結語は何らかのことばが一般的に使われている。吉田実科読本

〈表11〉 結語

結語	種類	書簡数	結語別割合	割合
かしこ	かしこ系	36	69.2%	82.7%
あら／＼かしこ		2	3.8%	
あなかしこ		1	1.9%	
めでたくかしこ		3	5.8%	
草々かしこ		1	1.9%	
早々	漢語系	1	1.9%	3.8%
匆々		1	1.9%	
あら／＼	その他	1	1.9%	1.9%
結語なし		6	11.5%	11.5%
合 計		52	100%	100%

では「かしこ系」66.7%、「漢語系」23.1%、「結語なし」10.3%、元元堂高女読本では「かしこ系」60.9%、「結語なし」21.7%、「漢語系」13.1%、「その他」4.3%、吉田高女読本は「かしこ系」74.1%、「漢語系」11.1%、「さよなら系」と「結語なし」が7.4%、吉田中学読本は「漢語系」72.2%、「結語なし」16.7%、「かしこ系」11.1%である。結語では、高女と実科高女ともに「かしこ系」が中心である。

また、吉田中学読本では、「漢語系」が中心で、特に結語においては男女の違いが明確である。

頭語、結語ともに女子の読本ということもあり「漢語系」は少ない。頭語と結語の呼応関係をみても「漢語系」-「漢語系」と呼応しているものはなく、現在の「拜啓」-「敬具」のような関係もみられない。

5、考察

本稿では、作文教育の在り方を通史的に捉える上で、書簡文の存在が重要と考え、書簡文に着目し、その役割について議論してきた。そして、本稿では元元堂実科読本を史料として、元元堂高女読本、吉田実科読本、吉田高女読本及び吉田中学読本との比較対照も行いながら議論した。今一度、〈表12〉にその概要を整理しておく。

作文教育を議論する場合、小学校、中学校、高等女子学校が中心であるが、作文教育史を総括的に捉えるためには、各校種の作文教育の在り方を究明する必要があると考えている。

そこで、本稿では、実科高等女子学校が設置された1911年頃を中心に、読本における書簡文がどのような役割で採録されているかを言及した。これが、滑川道夫(1977)が述べているように大正期・昭和期を通じて主要な指導内容である書簡文が作文の主要な指導項目であり、なぜ書簡文が重視されたかを明らかにすることにつながり、ひいては作文教育を通史的に捉えることができると考えるためである。

その結果、以下のことが明らかになった。

- ・構成や内容項目ごとの提示から、実生活の場で活用できる読本編集がなされ、参考書としての役割を有しているといえる。つまり、往来物として、実生活の場で円滑に交際できるための通信本来の書簡文を書く力が求められたということである。これは、元元堂実科読本には報知(旅信)の採録がないことからいえる、自由作文として思考を鍛える役割というよりは、書簡文そのものを書く力が求められているといえる。
- ・内容項目での課の設定は、元元堂高女読本や吉田高女読本にはみられない傾向である。書簡文の採録の在り方からも、実科高等女子学校と高等女子学校の差異がみられ、女子教育においても教育の二極化がみられる。
- ・巻の後半に位置づけられた書簡文は、読み物として、読んで理解させるものであるが、特に忠告では、女性としての生き方や家庭人(妻)としての有様について説いたもので、通信としての役割というよりは、書簡文がもつ相手が明確であり、伝えたいことがある、相手に分かりやすく述べる等のよさを活用しての採録といえる。つまり、書簡文の形式を活用して、女性としての生き方を方向づけるための材料として活用されたといえる。これは、通信本来の書簡文の

役割の他の役割として、本稿では「書簡文の役割の拡大」と捉えた。

本稿では、元元堂実科読本の1911年頃を中心に議論したが、今後元元堂実科読本の変遷を整理し、他の実科高等女学校読本及び高等女学校読本との変遷と照らし合わせて議論する必要があると考えている。また、本稿では、読本における書簡文を中心に議論したが、作文教科書における書簡文について究明する必要があるとあり、読本と作文との関連、作文と習字との関連からも議論する必要があると考えている。

〈表 12〉各読本の概要

(単位 %)

年代	1911(M44)	1912(T1)	1912(T1)	1912(M45)	1911(M44)
	元元堂実科読本	元元堂高女読本	吉田高女読本	吉田実科読本	吉田中学読本
採録書簡文	21.3(52/244)	7.8(23/293)	9.1(27/297)	15.9(39/245)	6.9(18/260)
往復便	27.5(11/40)	35.3(6/17)	22.7(5/22)	5.6(1/18)	0.0(0/18)
往信	75.0(39/52)	60.9(14/23)	77.8(21/27)	79.5(31/39)	77.8(14/18)
返信	25.0(13/52)	39.1(9/23)	22.2(6/27)	20.5(8/39)	22.2(4/18)
<small>採録送出人の男女比</small>	女性94.2 男性5.8	女性60.9 男性39.1	女性55.6 男性44.4	女性69.2 男性30.8	女性0.0 男性100.0
毛筆体	98.1(51/52)	73.9(17/23)	25.9(7/27)	0.0(0/39)	55.6(10/18)
内容項目	報知・贈答→誘引・貸借・見舞・忠告	忠告→報知→問合	報知→忠告→報知(旅信)	報知(旅信)・忠告	報知→忠告→報知(旅信)
戦争関係	0.0(0/52)	4.3(1/23)	3.7(1/27)	0.0(0/39)	11.1(2/18)
外国からの書簡	0.0(0/52)	0.0(0/23)	11.1(3/27)	5.1(2/39)	5.6(1/18)
文体	口語1.9 候文75.0 混合23.1	口語4.3 候文95.7	口語7.4 候文85.2 混合7.4	候文64.1 混合35.9	口語5.6 候文61.1 文語5.6 混合27.7
往信の頭語	「頭語なし」→「筆系」「漢語系」	「頭語なし」→「筆系」	「頭語なし」→「筆系」「漢語系」	「頭語なし」→「筆系」→「漢語系」	「頭語なし」→「漢語系」
返信の頭語	「頭語なし」→「拝見系」「その他」	「頭語なし」→「その他」→「拝見系」	「頭語なし」「その他」→「拝見系」「有難系」	「その他」→「有難系」→「拝見系」「漢語系」「頭語なし」	「頭語なし」「その他」
結語	「かしこ系」→「結語なし」→「漢語系」→「その他」	「かしこ系」→「結語なし」→「漢語系」→「その他」	「かしこ系」→「漢語系」→「さよなら系」「結語なし」	「かしこ系」→「漢語系」→「結語なし」	「漢語系」→「結語なし」→「かしこ系」

引用・参考文献

- 天野晴子 (1998) 『女子消息型往来に関する研究－江戸時代における女子教育史の一環として－』
風間書房
- 井上敏夫 (1981) 『国語教育史資料第二巻教科書史』東京法令出版
- 樺島忠夫・寿岳章子 (1965) 『文体の科学』綜芸社
- 北澤尚 (1999) 「明治時代の女学生の書簡の文体」東京学芸大学紀要出版委員会『東京学芸大学紀要第2部門人文科学』50,pp.269-281.
- 東京開成館編輯所 (1924) 『新制女子国語読本教授参考書巻八』東京開成館

中嶋真弓 (2019) 「実科高等女学校にみる書簡文教材の一考察 - 吉田彌平他3名編『女子国語読本実科用』を中心に -」愛知淑徳大学文学部論集編集委員会『愛知淑徳大学 - 文学部篇 -』第44号, pp.99-110.

中嶋真弓 (2020) 「元元堂読本にみられる書簡文教材の一考察 - 吉田彌平読本との比較を通して -」愛知淑徳大学文学部論集編集委員会『愛知淑徳大学 - 文学部篇 -』第45号, pp.105-118.

滑川道夫 (1977) 『日本作文綴方教育史1 明治編』国土社

野地潤家 (1976) 『作文・綴り方教育史資料上』桜楓社

野地潤家 (1998) 『野地潤家著作選集第8巻 中等作文教育史研究Ⅰ』明治図書

野地潤家 (1998) 『野地潤家著作選集第9巻 中等作文教育史研究Ⅱ』明治図書

広瀬豊 (1937) 『吉田松陰書簡集』岩波書店, p.111, p.210.

眞有澄香 (2005) 『「読本」の研究 近代日本の女子教育』おうふう

茗荷円 (2017) 『近代日本女性書簡文の表現史研究』おうふう

文部省 (1910) 『明治四十三年度現在師範学校中学校高等女学校使用教科図書表』

文部省 (1911) 『口語体書簡文に関する調査報告』

(本研究は、愛知淑徳大学研究助成 2020 年度特定課題研究「高等女学校における国語教育の研究 - 書簡文教材を視座に -」の成果の一部である。)